

皇太后陛下の御崩御を悼み奉る

皇太后陛下の御崩御を悼み奉るは、国民全体のことであるが、嘗て、当時の東京女子高等師範学校附属幼稚園に一ヶ年御在園あらせられた御縁りと、皇后陛下として、皇太后陛下として、同校に行幸又行啓あらせられた有り難い思い出とによつて、特別の哀悼をおさえ難い次第である。陛下の御仁慈とすべてに対する貴い御母性とは、われらの更めて申上げることではないが、大正四年十月震災後のお茶の水のバラツク園舍に行啓あらせられた際、時の幼稚園主事として讃誌した記録の中から、陛下の幼児への御やさしさの節々を抜すくする（「幼稚園雑草」から抄出）

『……そして御説明のためお側近く進んだ私を顧みさせられて、子供達は皆丈夫ですかといふ意味のお言葉を賜つた。そのお心の籠つた第一のお言葉の有り難さが今尙耳に残る。』

『……小さい画家達は椅子をすらす様にして、机に腕をつけてクレオント勤かしていた。陛下は畏れ多くも、そのうしろからそつと小さい椅子をお押し下さつた。一人の子は静に身を浮かせて、再び静かに腰をおろした。もう一人の子は、それにも心づかぬらしくたゞ一心に絵を塗りつけた。陛下は、一生懸命ですねと仰せられながら、一段と晴れやかにほゝえまれた。……』

『……窓の外には秋晴の日光が庭一ぱいにあたつている。窓のすぐ向うが砂場にある。そこで大勢の子どもが、わき目もふらず山をつくつてゐる。以前の建物の位置と少し傍へよりまして、庭も狭くなりましたと申上げる。と、そうですね、藤棚もなくなりましたねと仰せらる。惜しいことをしましたね、あの下で遊んだものと仰せある。陛下の御幼時の御記憶があり／＼とそこにお見え遊ばすのである。私達の使いなれた言葉でいえば、いろ／＼おなつかしく思召したのである……』

『陛下が幼稚園で第一に御下問になつたことは、前に書いた様に子供達の健康であつた。お帰りだけには、また私を顧みさせて、いつでも子どもは可愛らしいものですねと仰せられた。このお言葉は、たゞに此の幼稚園ではなく、幼稚園といふものへ賜つたお言葉として持してよからう。単に幼稚園に限らず、我國のすべての幼児へのお言葉として持してよからう。』

お茶の水時代の幼稚園の藤棚は、大藤棚として昔の戸名所図絵にもある程の名木であり、年々美しい花が長い房を垂れた。震災で焼けたが、後にその根から新しい芽をふいて我々を喜ばせた。大塚の新園舎へ移ると共に、その若藤も素より共に移つて、遊園の一部を占めている。そしてお茶の水をつぐものゝ大切な一つとして、いつまでも護られている。今や紫の花の咲く時も近い。